

第2回高尾山古墳連続講座

2024年10月14日（月・祝）

13:00～16:30

@沼津市市立図書館視聴覚ホール

東日本古墳文化の幕開けと高尾山古墳

【スケジュール】

13:00～13:10 講座開始

13:10～13:25 趣旨説明・講師紹介（沼津市）

13:25～14:15 講座1 若狭 徹 氏（高尾山古墳整備委員会委員・明治大学教授）
「関東における古墳出現と高尾山古墳」

14:15～14:30 休憩

14:30～15:20 講座2 北條 芳隆 氏（東海大学教授）
「前方後方墳の系譜と東駿河の大型壺」

15:20～15:40 休憩

15:40～16:20 トークイベント「高尾山古墳の成立と東日本古墳文化への影響」
若狭氏、北條氏（進行：文化振興課）

16:20～16:30 主催者挨拶・終了

高尾山古墳の基礎知識 Ver.2

【これまでの経過】

昭和 53 年	小野真一が、高尾山穂見神社の小高い丘を「高尾山古墳」と命名。
平成 17・19 年度	試掘調査が実施され、前方後方墳の可能性が高まる。
平成 20・21 年度	本発掘調査が実施され、東日本最古級の古墳と判明。
平成 23 年度	発掘調査報告書刊行。
平成 24 年度	調査成果を公表するシンポジウム開催。
平成 27 年度	古墳の解体方針は白紙撤回。 第 1 回高尾山古墳保存と都市計画道路（沼津南一色線）整備の両立に関する協議会の開催。
平成 29 年度	都市計画道路沼津南一色線の整備方針公表。
令和元年度	都市計画道路沼津南一色線設計競技（コンペ）実施。
令和 4 年度	国史跡指定に向けた意見具申書を提出。
令和 6 年度	国指定史跡にふさわしい遺跡として文化審議会が文部科学大臣へ答申を受ける。 <u>10 月 11 日官報告示により国指定史跡となる。</u>

【高尾山古墳の基礎データ】

古墳の形：前方後方墳

全 長 ：約 62.178m（前方部：30.768m、後方部：31.410m）

墳丘高 ：後方部 5m、前方部 1m?

周溝幅 ：8～9m（南端は 2m 前後）

埋葬施設：長軸 3.408m×短軸 1.237m の長楕円形（舟形木棺）

年 代 ：3 世紀中ごろ

【副葬品】

- ・鏡 ：中国で作られた青銅鏡で 1 面出土。副葬に際して意図的に割られた「破碎鏡」被葬者の頭付近に置かれていた。
- ・鉄槍：2 本出土。1 本はもともと剣であったものを作り替えたもの。
- ・鉄鏃：矢の先端につく矢じり。大きく 3 種類の形があり、計 32 本出土。
- ・やりがんな：彫刻刀のような小形の刃物。全長 12 cm。1 本出土。
- ・勾玉：1.25 cm という非常に小さな石製勾玉で、棺のほぼ中央から 1 点出土。

【出土土器】

- ・古墳時代前期に造られた古墳としては、土器の出土量が極めて多い。
- ・地元の土器以外に東海西部・近江・北陸・関東などに由来をもつ土器が多数出土。

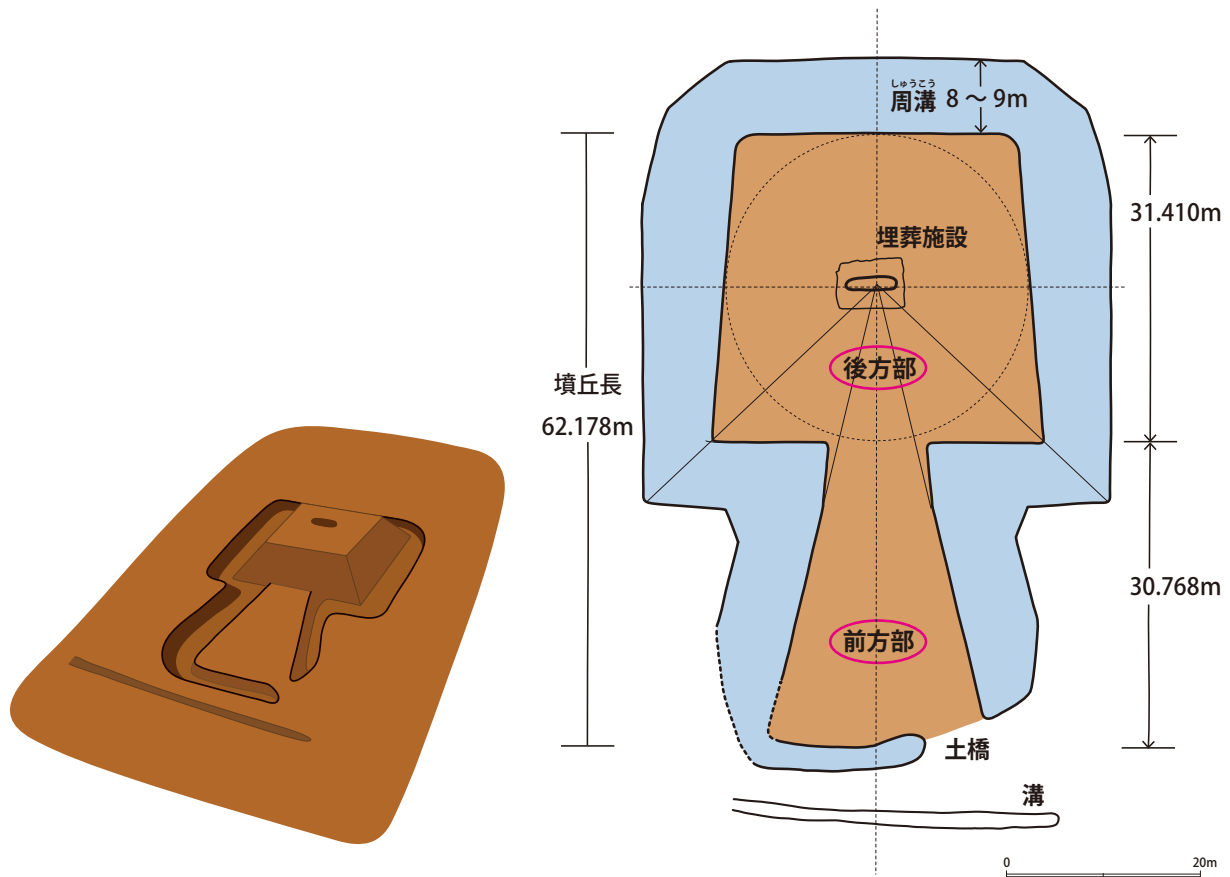
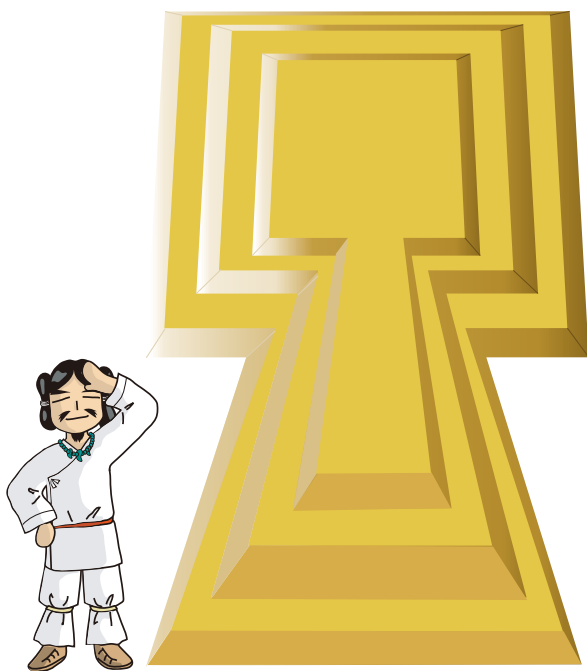


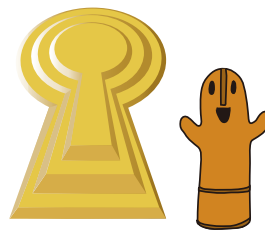
図1 高尾山古墳の俯瞰イメージと平面形復元図

前方後方墳



方形と方形(台形)をつなぎ合わせた形。愛知県より東に多く、また古墳時代の古い段階に限りて造られた。沼津では高尾山が唯一の例。

前方後円墳



方形と円形をつなぎ合わせた形。大規模なものが多く全国的に造られた。沼津には神明塚・長塚・子ノ神と3つの前方後円墳がある。

上円下方墳



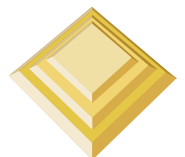
方形の上に円形を乗せた形。古墳時代の終わり頃に登場し、全国的に数が少ないが、沼津には清水柳北1号墳がある。

円墳



円形をした古墳。小形のものが多く、古墳時代後半を中心に多くの円墳が造られた。沼津では愛鷹山を中心に分布する。

方墳



方形をした古墳。円墳より数は少ないがほぼ古墳時代を通じて造られた。

図2 様々な古墳の形

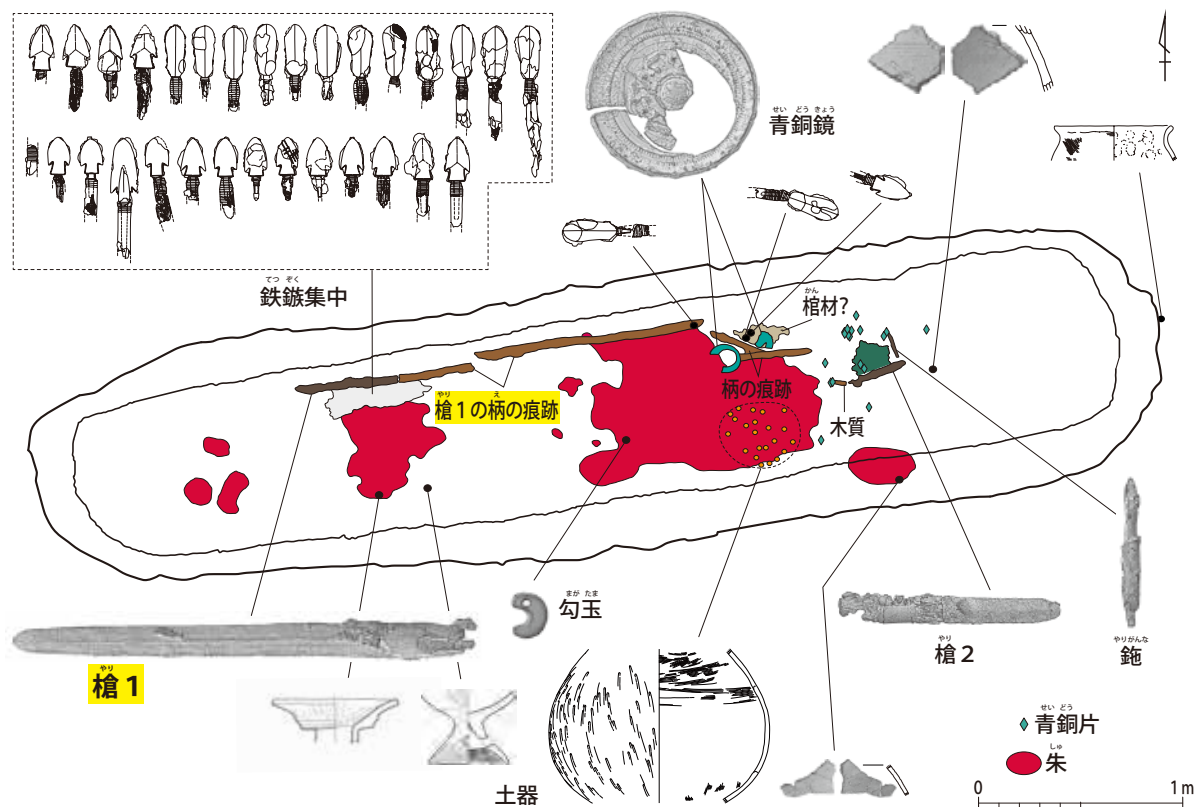


図3 埋葬施設遺物出土状況

時 代	駿河中部	駿河東部	中部高地	相 模
弥生末	弥生墳丘墓	丸ヶ谷戸 26m	古墳の登場	
250年		高尾山 62m	弘法山 63m	秋葉山4号 37m
古墳初期	神明山1号 73m	神明塚 54m		秋葉山3号 51m
300年		向山16号 70m		秋葉山2号 50m
古墳前期	午王堂山3号 78m		小平沢 40m	塚越 55m
400年	午王堂山1号 40m	浅間 90m	森將軍塚 96m	長柄桜山1号 90m
	柚木山神 110m		大丸山 99m	

図4 駿河・中部高地・相模地方における初期から前期古墳の年代

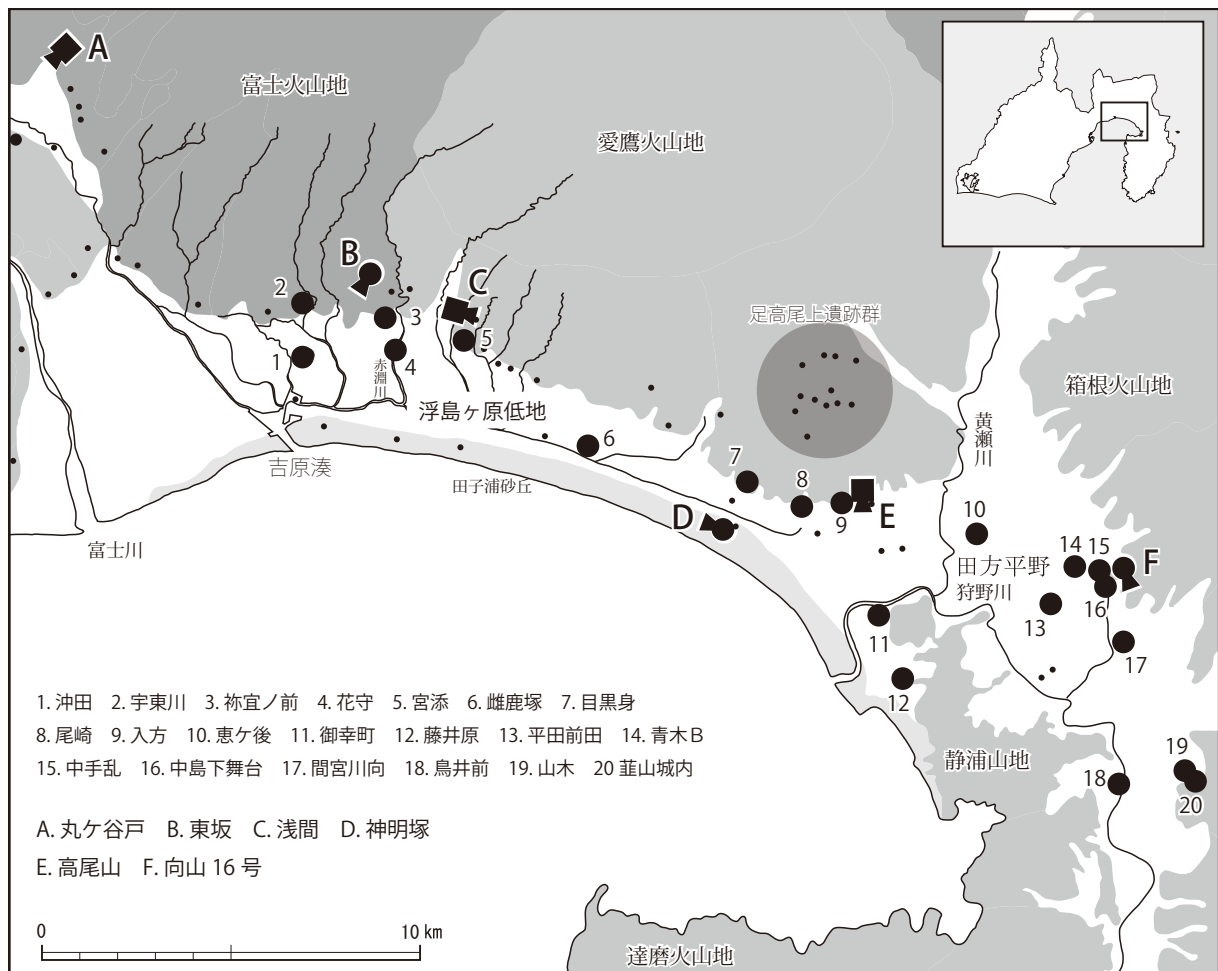


図5 高尾山古墳周辺における集落と古墳分布



埋葬施設及びその直上出土の遺物（青銅鏡・槍・鉄鏃・勾玉・ヤリガンナ・土器



古墳出土の外来系土器（北陸系・近江系・東海西部系・関東系）

東日本古墳文化の幕開けと高尾山古墳 2024年10月14日 沼津市図書館

関東における古墳出現と 高尾山古墳

若狭 徹（明治大学文学部）



- 臨海地域と内陸地域
- 古利根川と2つの内海世界

○第1波

- ・天竜川以西の東三河・西遠江の山中式集団
- ・天竜川以東の菊川式集団

○第2波

- ・尾張・伊勢の廻間式集団

南関東集団の再編と北進

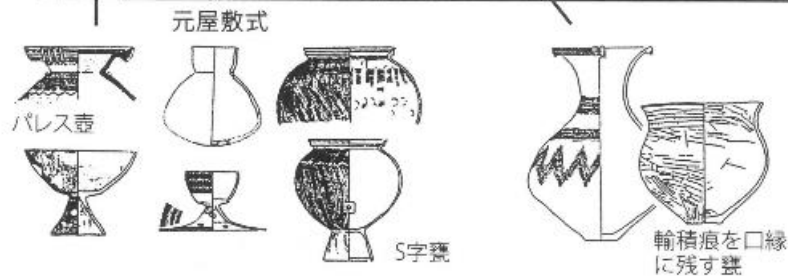
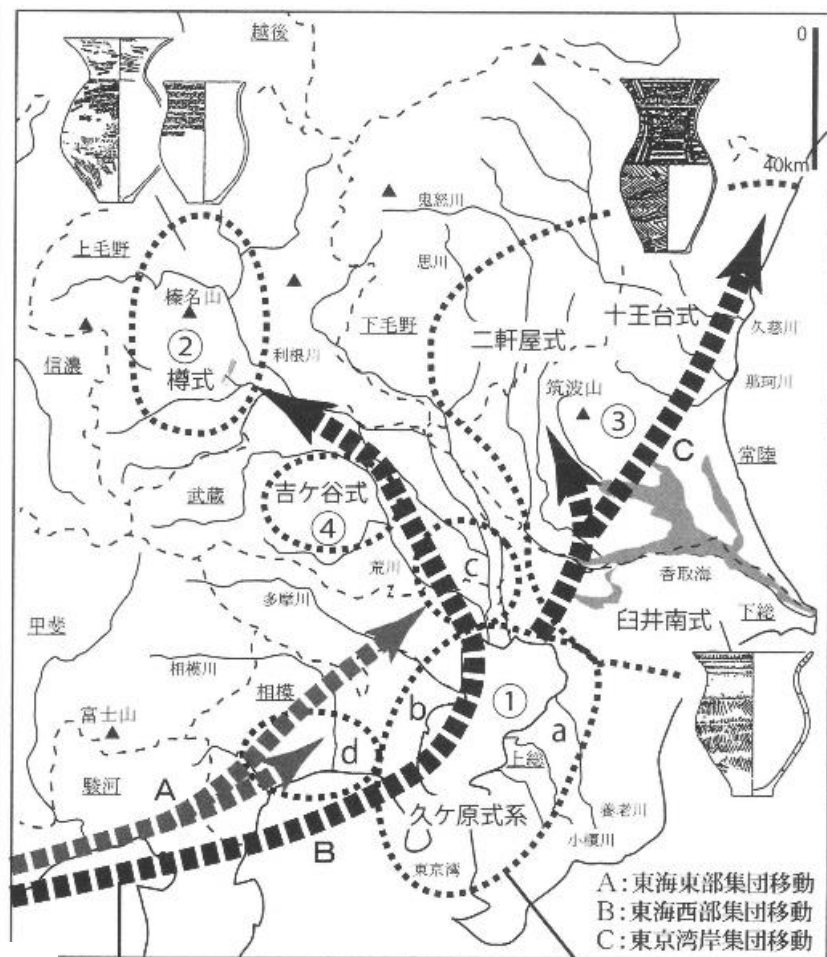


図3 弥生後期の土器様式圏と集団移動

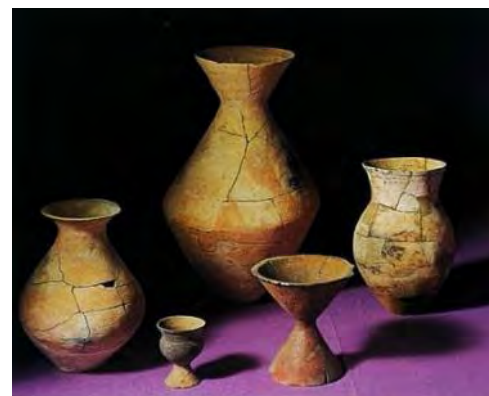
若狭作図



元屋敷（廻間）式土器（愛知県埋蔵文化財センター）



神奈川県綾瀬市神崎遺跡（綾瀬市HP）



樽式土器（群馬県埋文事業団）



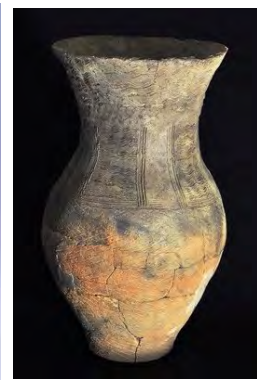
久ヶ原式土器（大田区HP）



石田川式土器（群馬県埋文事業団）



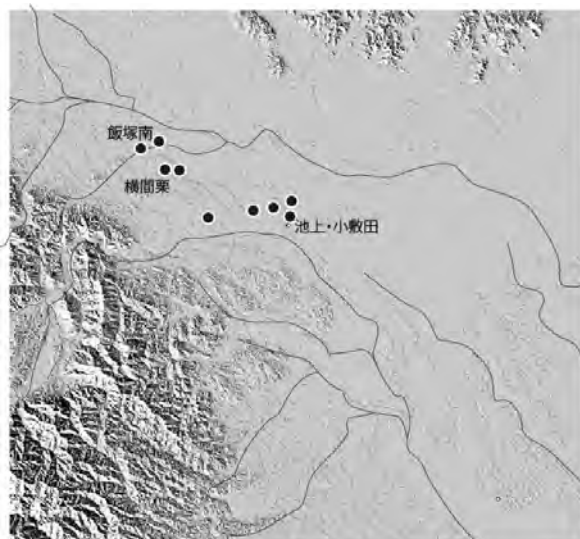
吉ヶ谷式土器
（熊谷市ウェブ博物館）



十王台式土器（日立市郷土博物館）

集団移動の背景・・・環境変動と政治変動

4



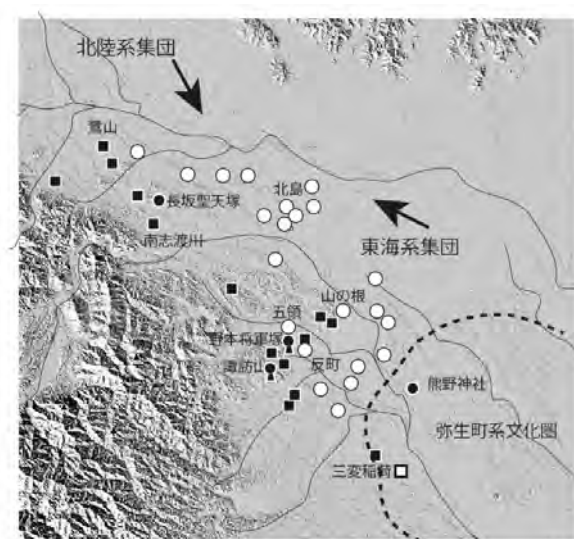
1. 弥生中期中葉（池上期）

0 10km



3. 弥生後期前半（岩鼻期）

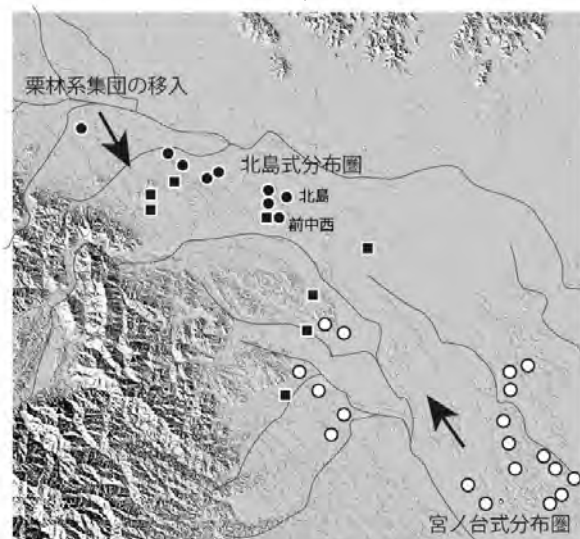
0 10km



5. 古墳前期

0 10km

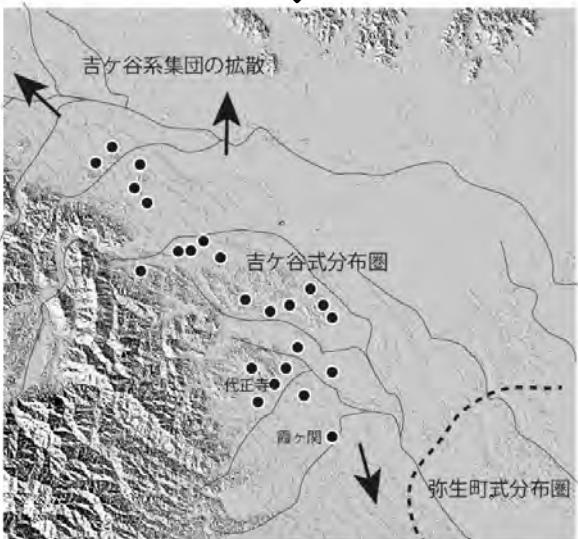
○ 集落 ■ 前方後方墳
● 前方後円墳 ● 円墳



2. 弥生中期後半（北島期）

0 10km

● 北島式 ■ 栗林式 ○ 宮ノ台式



4. 弥生後期後半（吉ヶ谷期）

0 10km

埼玉県北部の遺跡動態

弥生中期

・・・低湿地・大規模

弥生後期

・・・台地・小規模・分散

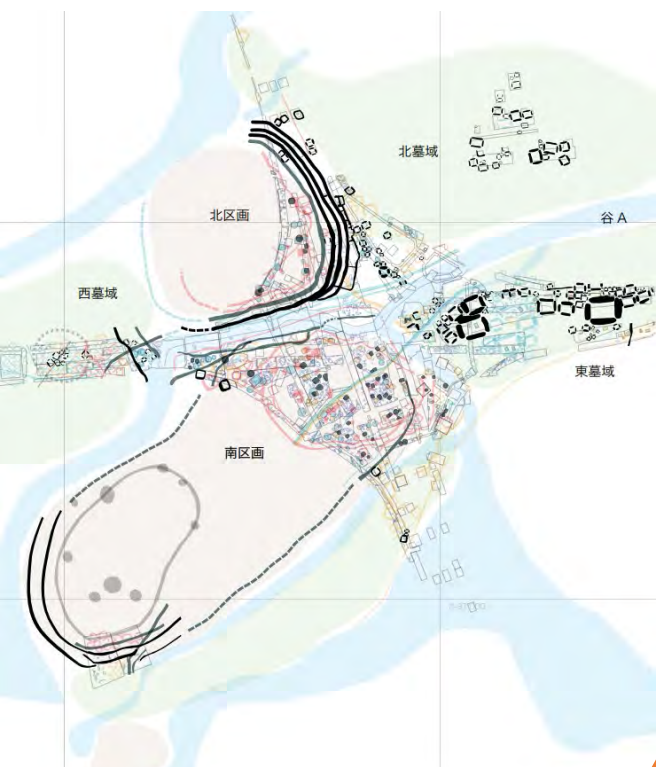
古墳前期

・・・低湿地・外来集団
大規模

濃尾平野の中核集落 朝日遺跡の変遷と解体

5

弥生中期中葉（最大期）

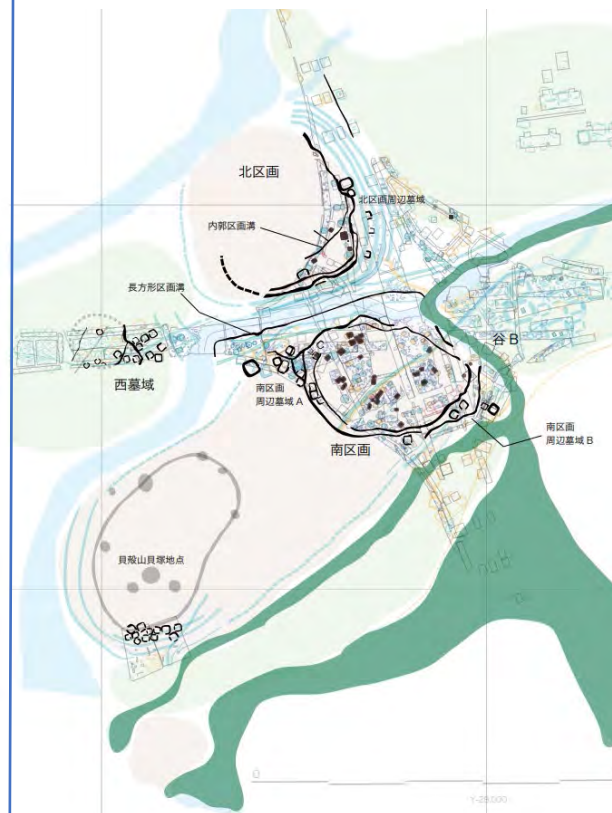


弥生中期末葉（洪水災害期）



図 2.5 弥生中期末葉（紀元前 2 世紀前後の様相）

弥生後期（小規模化）→解体



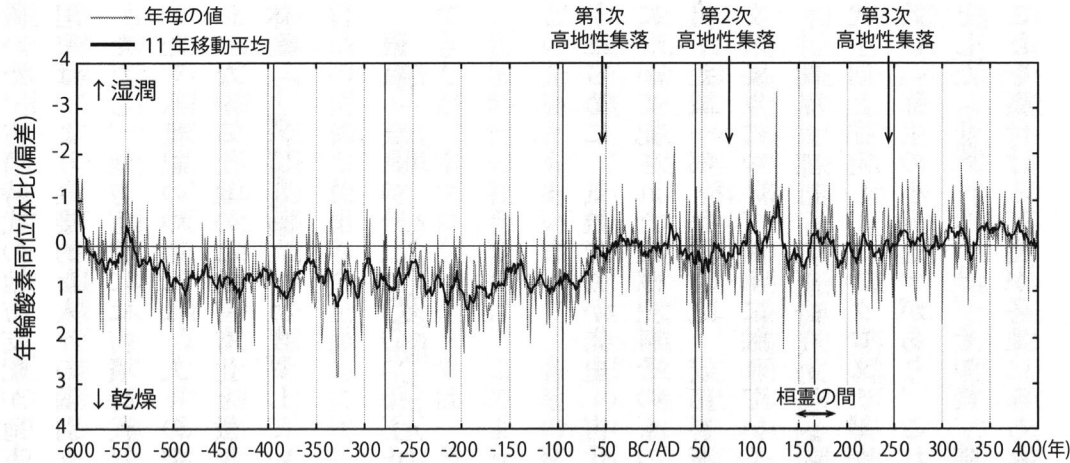
図：赤塚次郎ほか2009『朝日遺跡 8』愛知県埋蔵文化財センターより

逆茂木遺構

防衛施設→水害対策施設
(赤塚2009)



あいち朝日弥生ミュージアムHPより



時代区分 (日本)	弥生前期		弥生中期				弥生後期		庄内式期		古墳前期											
土器編年 (畿内)	第Ⅰ様式		第Ⅱ様式		第Ⅲ様式		第Ⅳ様式		第Ⅴ様式													
	安田(田辺・佐原1966)の年代観								Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ							
時代区分 (中国)	春秋			戦国			秦		前漢			新		後漢			三国		晋		南北朝	

図2-1 紀元前6～紀元後4世紀の中部日本における年輪セルロース酸素同位体比の変動
畿内の土器編年・安田年代観・中国の王朝・高地性集落の時期は槌上加えた。なお、
高地性集落の時期比定は寺沢 2000を参照した。

槌上昇2021「気候変動と先史・古代史研究」『気候変動から読み解く日本史 1』臨川書店より



登呂遺跡水田にみる矢板（登呂博物館HPより）



弥生後期の農具（復元品。右上：泥除け付き）三重県埋蔵文化財センター

後期の多雨・寒冷化による水田の湿地化

- ➡ 畦畔への矢板施工
- ➡ 農具の湿地対応（広鍬に泥除け装備、又鍬の長刃化）

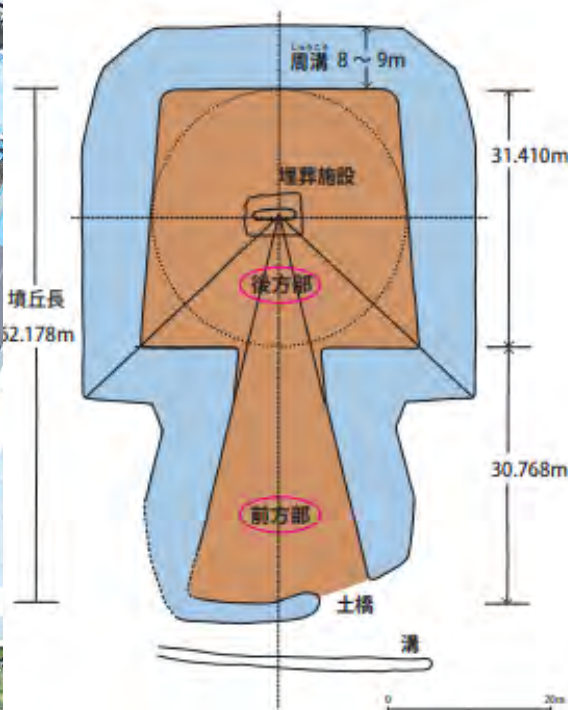
（槌上昇 2019「東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と環境変動」『気候変動から読み解く日本史3』）

東海から関東地方の前期大型古墳の動向

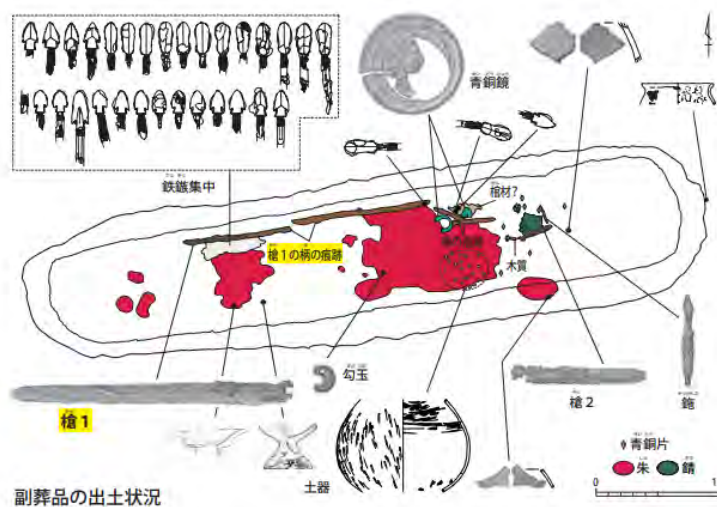
- ・ 関東ではまず、前方後方墳が内陸部、前方後円墳が沿岸部に波及
- ・ 東海地方では1期の大型前方後方墳が低調。

無印：前方後円墳 ■：前方後方墳 60m以上を表示（0期のみ小型も表示）。80m以上の前方後方墳を太字で表記

時期	伊勢	美濃	尾張	三河	遠江	駿河	上野	下野・那須	武蔵	相模	上総	常陸
0		■東町田 10号17	■西上免40 ■廻間25			■丸ヶ谷戸 26					神門5号42 ■高部30 号34	
1						■高尾山60 神明山69		■駒形大塚 64				
2		■高塚60 ■西寺山60 ■北山83	■東之宮80	■二子69			■將軍塚95 ■前橋八幡山 130 ■寺山60				今富塚山 110	星神社 90
3	■向山71	花岡山60 親ヶ谷85 円満寺山60 矢道長塚90 龜山98	■高御堂65 二ツ寺神明 社80	姫小川69 八幡66		■午王堂山 78 ■浅間100 谷津山114 向山16号70	■藤本観音山 117 前橋天神山129 下郷天神塚102 朝子塚123	■那須八幡 塚68 ■下侍塚84 ■大榎塚96	■鷺山60 野本將軍 塚120 宝来山100 龜甲山104	長柄桜山 2号80	浅間神社 100 姉崎天神 山130 飯籠山102	梵天山 160 葦間山141 長辺寺山 120
4	池の谷90 能褒野王 塚90	■粉糠山 100 南山96 長塚72 坊の塚120	青塚123 白鳥塚109 白山神社100 八高70 高田87	甲山120 正法寺91 和志山60	銚子塚112 松林山107 庚申塚83 瓢塚63 ○兜塚80	三池平67 東坂60	浅間山172 大鶴巻123	■上侍塚 114	白山87 観音松90 芝丸山110	長柄桜山 1号90	釈迦山93 白山神社89 油殿93 柏熊杓子 塚72	日下ヶ塚 106 木原愛宕 塚100



主な外来系土器 (右奥の甕：北陸系、その他：東海西部系)



副葬品の出土状況

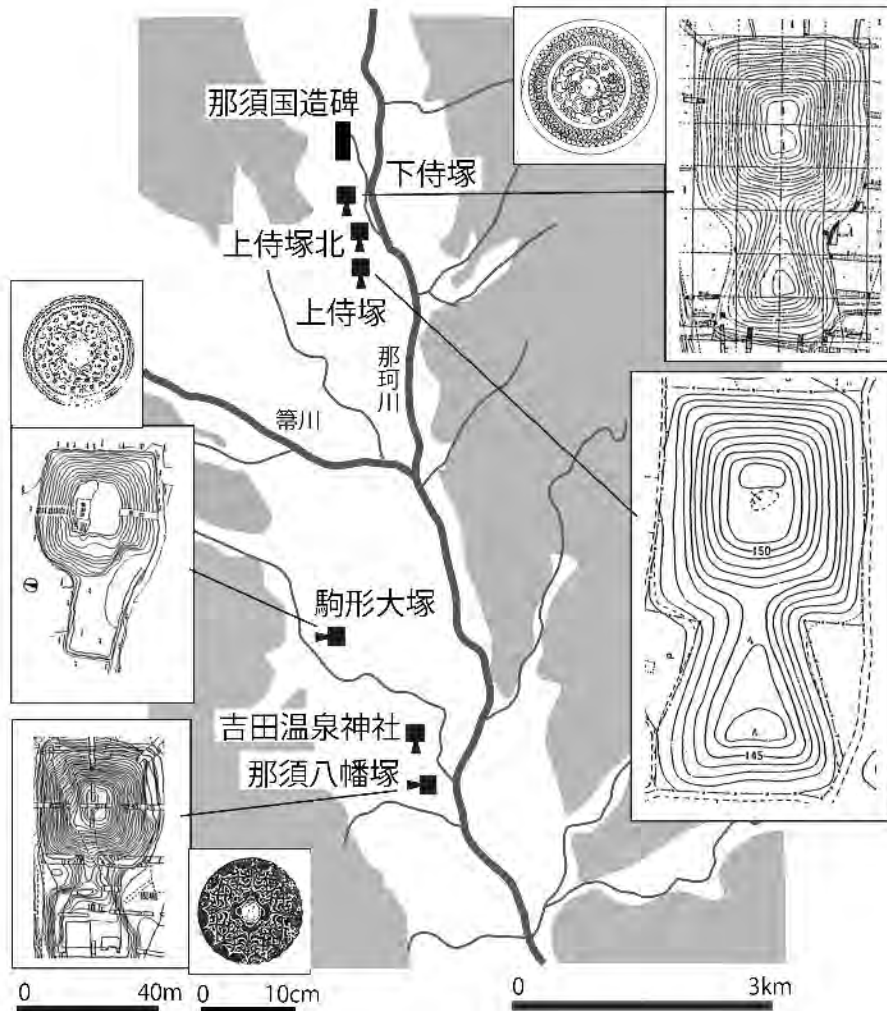


出土した副葬品

スルガ最初の王ここに眠る『高尾山古墳』沼津市教委より

関東の前方後方墳

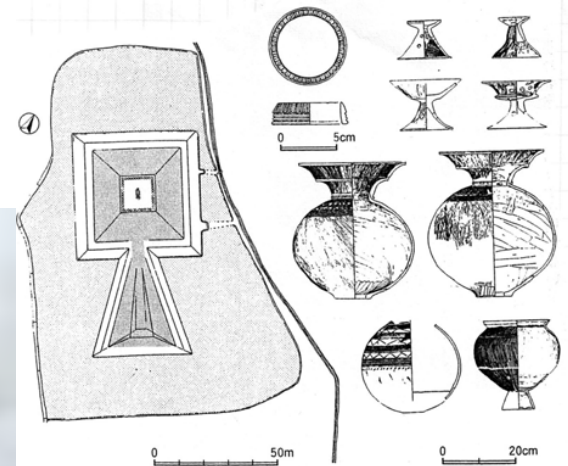
- ・ 大形墳は、上毛野(群馬県)と那須(栃木県北東部)
- ・ 那須は強固な前方後方墳地域



那須の前方後方墳 (大田原市・那珂川町)
若狭2017『前方後円墳と東国社会』吉川弘文館より



毛野では伊勢型二重口縁壺＋S字甕による葬送儀礼。



元島名将軍塚古墳 (高崎市・96m、
高崎市教委1981『元島名将軍塚古墳』)



前橋八幡山古墳 (前橋市・130m、前橋市教委)

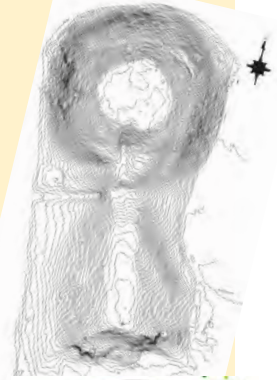
前方後円墳の出現動向

- ・ 1段階……臨海地域に出現（内陸は前方後方墳地域）
- ・ 2段階……内陸（上毛野・北武蔵）に前方後円墳が波及（三角縁神獣鏡の配布。倭王権との同盟関係構築）
- ・ ヤマトタケル伝承との照応

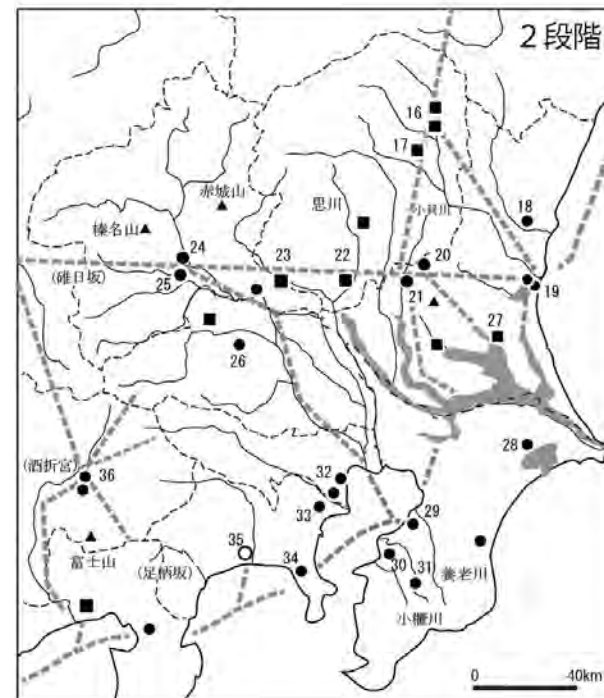
古事記…沿岸ルート、日本書紀…内陸ルート

➡ただし倭王権の征服史観は採らない

➡経済ネットワークで説明。



- 1 駒形大塚
- 2 星神社
- 3 三王寺南塚
- 4 前橋八幡山
- 5 元島名將軍塚
- 6 寺山
- 7 山の根
- 8 神門
- 9 今富塚山
- 10 高部
- 11 浅間神社
- 12 (宝来山)
- 13 秋葉山
- 14 天神塚
- 15 高尾山



- 16 上侍塚・下侍塚
- 17 那須八幡塚
- 18 (梵天山)
- 19 (大場天神山)
- 20 長辺寺山
- 21 葦間山
- 22 山王寺大樹塚
- 23 藤本観音山
- 24 前橋天神山
- 25 下郷天神塚
- 26 野本將軍塚
- 27 勅使塚
- 28 杓子塚
- 29 姉崎天神山
- 30 手古塚
- 31 飯籠塚
- 32 亀甲山
- 33 白山
- 34 長柄桜山
- 35 真土大塚山
- 36 甲斐銚子塚

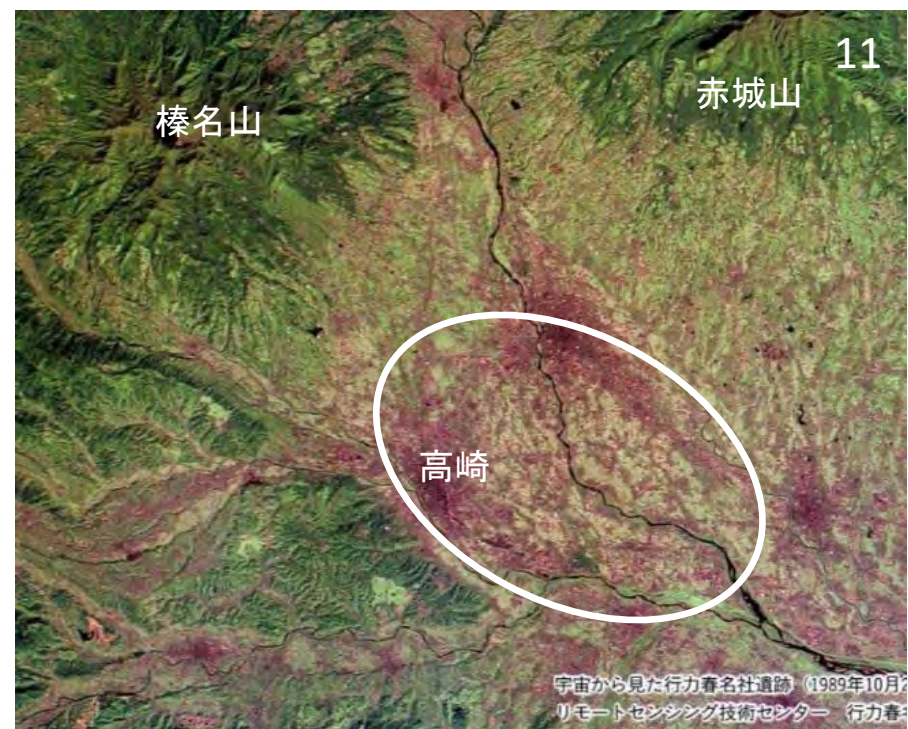
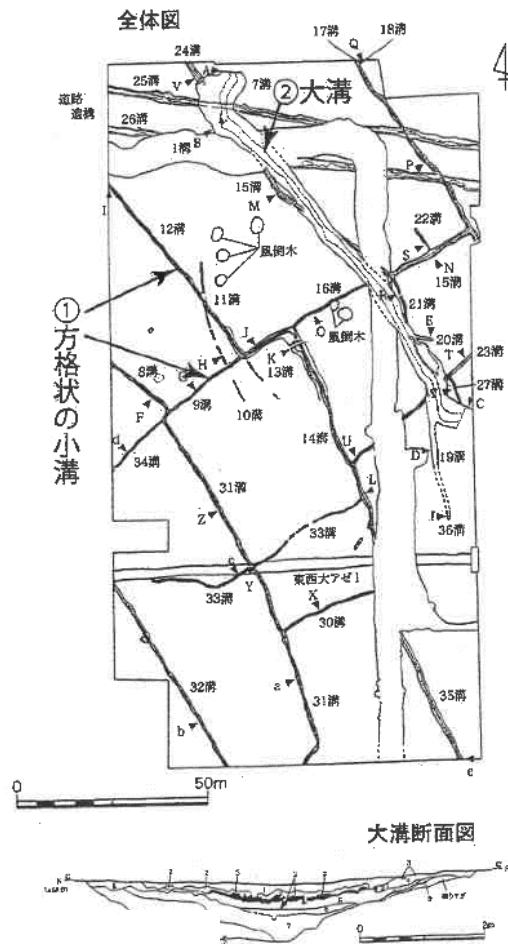
若狭徹2022「前方後円墳の社会的機能に関する一考察」『律令制国家の理念と実像』八木書店より

※前方後円墳図面は、埼玉県野本將軍塚古墳（城倉2018）、鏡は高坂古墳群（東松山市教育委員会）

移住集団による利根川 上流沿岸低湿地の大開発

砂町遺跡のモデル

- ①小溝による悪水の排出
↓
乾燥化
↓
- ②大溝の構築による給排水システム
↓
- ③水田化



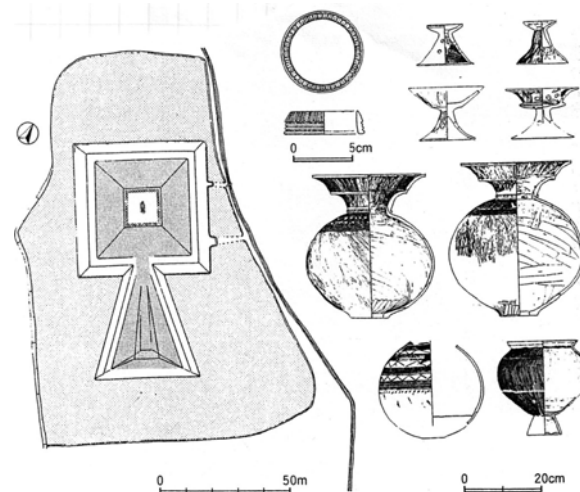
玉村町砂町遺跡(玉村町教育委員会)

外来集団を証するもの

12



農具：東海系の又鍬と製作跡（新保遺跡）



東海系墓制と葬送儀礼（元島名将軍塚）



低地性住居（上之手八王子遺跡）



水田と大規模水路（徳丸
仲田遺跡）



外来系土器様式（新保遺跡）



写真：群馬県埋蔵文化財調査事業団（上之手八王子のみ玉村町教委）

大廓型壺の分布と水上交通ネットワークの確立

○駿河湾—(伊豆半島)—相模湾—
(三浦半島)—東京湾—荒川—
利根川—上毛野【移住地】

○大廓型壺＝種粬船積み用壺（北條説）

○高尾山古墳被葬者は、第1次経済ネットワーク構築と、移住集団の後方支援。低地開発用の種粬供給。

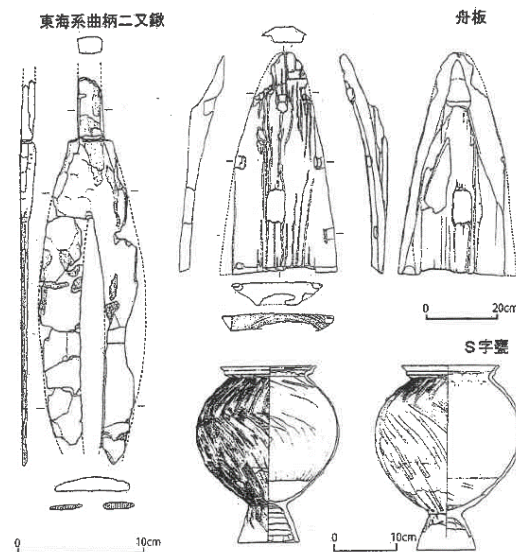
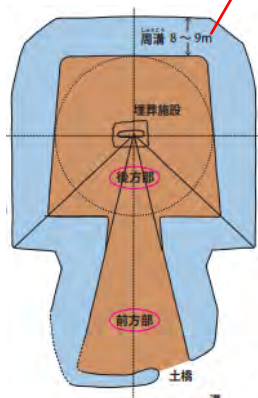
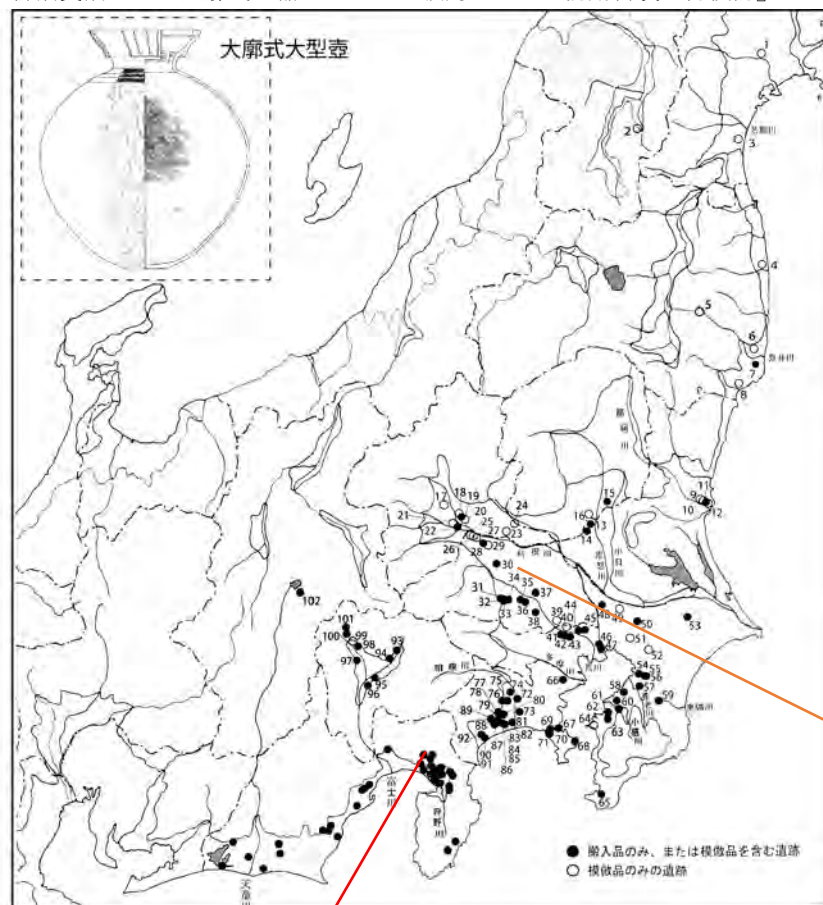


図3 小敷田遺跡5区河川跡出土品
(埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1991『小敷田遺跡』より)

前橋天神山古墳

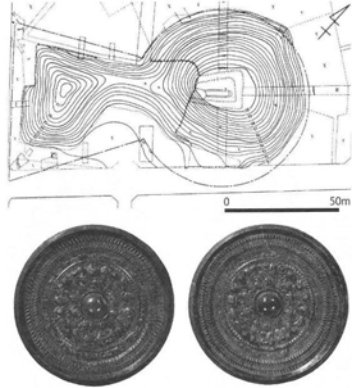


図18 前橋天神山古墳
上 墳丘図 (『群馬県史 資料編3』より)
左下 三角縁五神四獣鏡 (東京国立博物館所蔵, Image: TNM Image Archives)
右下 三角縁四神四獣鏡 (同上)

野本將軍山古墳・高坂の鏡・反町遺跡

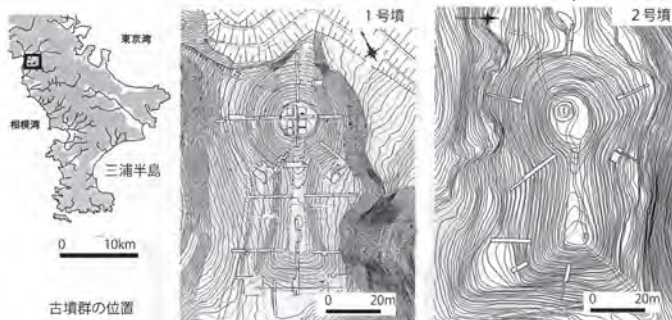


磯浜古墳群・大場天神山古墳



磯浜古墳群 (蓼沼香未由2015『磯浜古墳群』
『海浜型前方後円墳の時代』同成社より)

長柄桜山古墳群



古墳前期に完成した交通ネットワーク (広域経済圏・安全保障圏)

各図は若狭2017『前方後円墳と東国社会』より

関東の古墳時代の開始と高尾山古墳

- ・ 弥生後期の環境変動。多雨・寒冷化。
- ・ 農地・集落環境の不安定。東海地方集団の流動化。
- ・ 倭国成立期の政治的変動（魏志倭人伝）
- ・ 関東以北への東海集団の計画的大規模移住
- ・ 主流集団は上毛野・北武蔵・下毛野・那須へ（前方後方墳の優勢地帯）
 - ➡この時期、高尾山古墳が東海最大の前方後方墳。
- ・ 高尾山古墳被葬者は、東海西部と関東をつなぐ経済的・政治的ハブを担う（移住集団の後方〔補給〕支援。移住先の低湿地にマッチするブランド種粳の供給。
- ・ 海上交通と河川交通を組み合わせた交通網の確立
 - ➡その後、最大規模の前方後方墳は関東北部に所在。
- ・ 第2期に倭王権との経済的・政治的同盟による前方後円墳の波及（転換）。
- ・ 陸上交通・河川交通の乗り換え地点に海浜型前方後円墳。

前方後方墳の系譜と東駿河の大型壺

東海大学文学部 北條芳隆

講演の要旨

連続講座にお招き頂きましたことに感謝申し上げます。本日の私は、まず前方後方墳の系譜に関する現時点での研究状況をあたりながら高尾山古墳の位置づけを紹介します。次に高尾山古墳が築かれた時期に東駿河で多量に生産された大型壺（それを「大廓型壺」と呼びます）がどのような役割を果たしたのか。この課題について私の見解を紹介します。

前段では長野県弘法山古墳との比較を基礎に、方位観に関する古相と新相の話題、風水思想からみた古墳の機能を紹介します。また最古の前方後方墳は縄向メクリ1号墳で丸ヶ谷戸古墳も同形であることや、高尾山古墳の築造企画は前方後円墳である五塚原古墳と酷似することなどを紹介します。つまり前方後方墳の系譜は前方後円墳のそれと錯綜しながら相互に連動しており、祖型の起源地こそ近江地域ではあるものの、各地への発信源は大和地域に求められることをお話しします。

後段の内容は次のとおりです。卑弥呼の時代ともいわれる西暦3世紀の東駿河地域の人々は大和王権からの承認のもと、王権の代理役として、中部地方の甲斐地域や関東地方一帯に経済的な側面での積極的な働きかけをおこなった結果、中部や関東でも古墳時代が幕を開けることになった、との私案です。詳細は添付資料〈大廓エクспанション論〉に概要を示しています。

原資は静岡市の登呂遺跡や小黒遺跡、伊豆の国市の山木遺跡で生産された稲粳です。稲は量産されれば貨幣となりましたから、それを甲斐や関東各地に運び、荷揚げ場に市場を開設すれば、現地の人々を惹きつけ様々な物資が市に集まります。稲を貨幣とする市場交換が活性化したのです。では稲はどうやって甲斐や関東各地に運ばれたのでしょうか。それを担ったのが東駿河産の大廓型壺です。この特徴的な壺の生産地は狩野川河流域の一帯で、集積地と搬出港が高尾山古墳の近隣だったと推定されますので、高尾山古墳の被葬者は、関東各地に開設された市の司たちの胴元であった可能性が高いといえるのです。短時間ですがお付き合い下さい。

構成と概要

1. 高尾山古墳と弘法山古墳

① 年代、墳丘の規模や木棺の形状とサイズ、副葬鏡も同形式鏡という酷似した状況

＊相互に深い関係をもつ可能性が示唆される

③ 重大な相違点

＊墳丘築造法は弘法山古墳が「立石・葺石型」で高尾山古墳は「周溝型」

＊「周溝型」の最古例は奈良県縄向メクリ1号墳（弥生終末の庄内3式期）

＊「立石・葺石型」の最古例は奈良県縄向ホケノ山古墳、京都府五塚原古墳（前方後円墳）

＊弘法山古墳の埋葬施設は礫層で系譜は中部瀬戸内の備讃地域

＊高尾山古墳の埋葬施設は木棺直葬で系譜は畿内地域

＊木棺から副葬品までは大和王権が事前にあつらえ双方に贈与した可能性が高い。丸ヶ谷戸古墳や高尾山古墳の築造法は縄向遺跡と連動する。一方、弘法山古墳には中部瀬戸内の関与が付加された可能性が高く、その意味では後出的。

2. 太陽の運行と北天の周極星

① 風水思想的な解釈

- * 双方共に主山から発せられる「気」が被葬者の「魄」を集落域に運ぶ空間上の配置

② 古相の方位観と新相の方位観

- * 弘法山古墳の墳丘は冬至の日の出信仰、高尾山古墳の墳丘は北辰信仰への帰依を表明
- * 弘法山古墳は弥生時代から引き継ぐ古相の方位観で高尾山古墳は新相の方位観
- * 墳丘に直交する高尾山古墳の埋葬頭位は日の出・日の入り
- * 纏向大型建物Dの正面観との奇妙な一致

3. 高尾山古墳の主が主導した経済的支配

① 大廓型壺の重要性

- * 弥生終末期の東駿河で大量に製作され、甲斐や関東内陸部まで移送された大型壺
- * 最大容量は200ℓでこの時期の東海・関東では最大容量を誇る壺
- * カワゴ平パミス（白色軽石）を重量比で25%も含むため比重は軽く多孔質の壺
- * 口縁部内面突帯は木蓋を被せる工夫であり、海上輸送用に適した特徴をもつ

② 纏向遺跡に持ち込まれた大廓型壺

- * 大廓Ⅱ式期の壺は纏向遺跡の辻土坑4下層からS字状口縁甕などと共に出土
- * 土坑の下層に稲粃層があり、甕には炭化米が付着していた。最大容量は大廓型壺
- * 駿河産の米が大廓型壺に収納されて献上された可能性大
- * 辻建物2は東海地域の勢力が大和王権に食物を供献する服属儀礼を実施した証拠
- * 東駿河地域の有力者が王権の代理役として甲斐や関東の地域支配に乗り出す起点

③ 稲粃を甲斐や関東各地に持ち込んだ東駿河地域集団

- * 駿河地域一帯は氾濫平野を広域水田化したエリアの太平洋側の東端
- * 大廓Ⅲ式以降の大型壺は駿河産の稲粃を甲斐や関東に運んだ海上輸送用コンテナ
- * 陸揚げ先に交易拠点を設け、稲粃を原資とする市場交換の場を開設
- * 市場の開設と連動し、市場を見下ろす高台に前方後方墳を造営

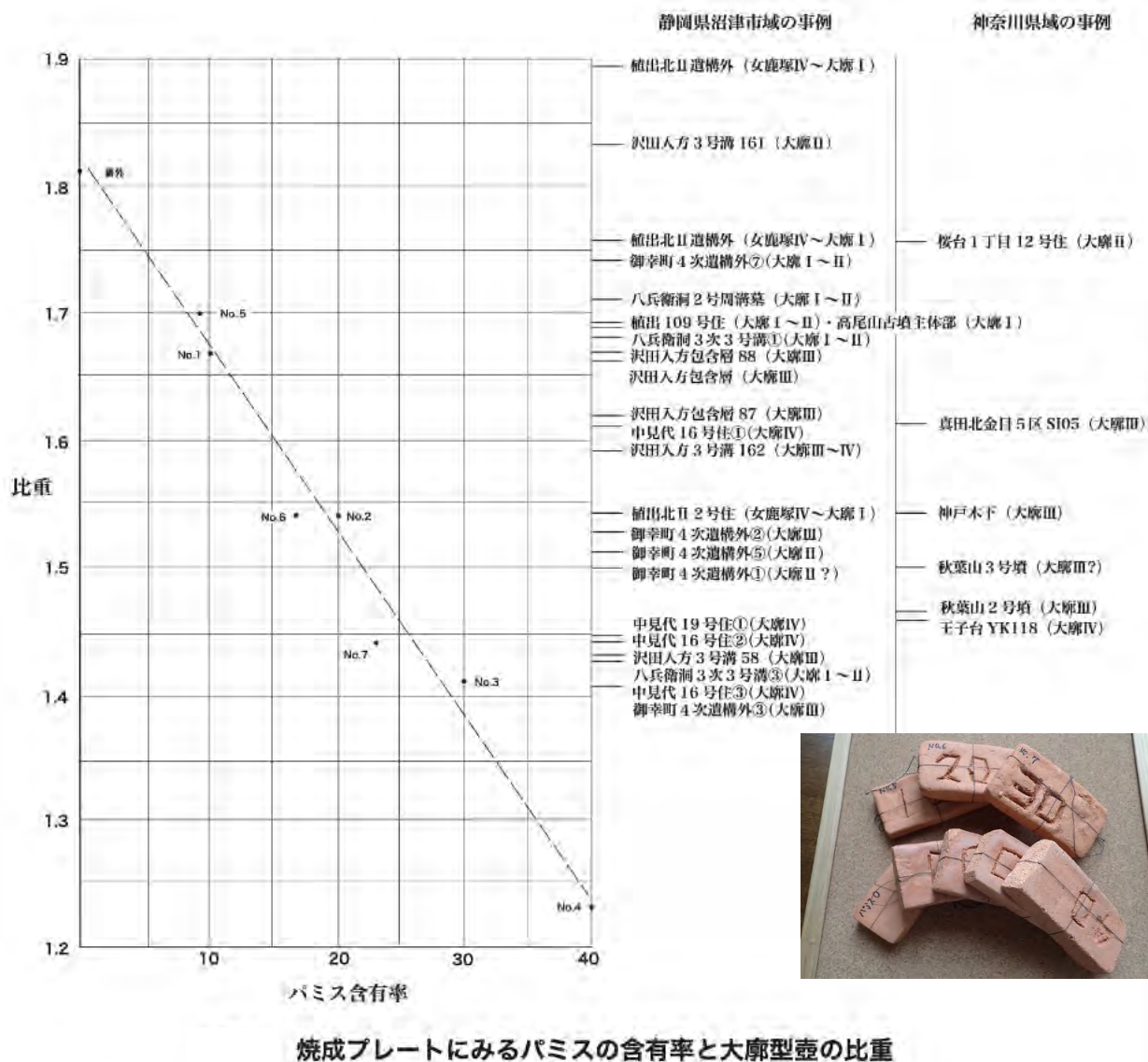
④ 前方後円（方）墳の時代の幕開けは稲粃建市場経済圏の拡大

- * 「魏志倭人伝」の記載とも整合する前方後円（方）墳の被葬者像
- * 初期前方後方墳の被葬者は「大倭」であった

添付資料〈大廓エクспанション論〉の概要

大廓型壺の評価に関する事実関係

- ① 最大容量200ℓ（最少容量22ℓ）を誇る大型の複合口縁壺 → 超大型の収容量への需要
- ② 弥生終末期から古墳時代前期前半にかけて東駿河で登場 → 関東甲信越地域に向けた作用
- ③ 口縁部上端が厳密な意味で平坦面をなし内面突帯を施す → 上面に木蓋を挿入する意図
- ④ 胎土にカワゴ平パミスを多量に混ぜ込む → 比重が低くなり、軽量で通気性と吸水性に富む
→ 土器の制作時間は短縮し、硬く焼成される
→ 耐火性に富むため炉壁への転用例がある
→ 墳丘盛土内に多量の破片が混ぜ込まれる（大廓Ⅲ式）
- ⑤ 用途としては稲粃など穀物類の貯蔵が考えられる → ③と④との関連



⑥ 分布の偏在性をみると海上輸送、河川航路が推定される → ②と③との関連

大廓型壺の評価に関する状況証拠

① 弥生後期以降、東駿河では海岸平野の広域水田開発が進む（登呂遺跡・小黒遺跡・山木遺跡など）

② 大廓Ⅲ式期（布留1式期）以降、関東の内陸部で低地部の水田開発が進む

③ 弥生終末期の周溝型前方後方墳は東駿河の富士山麓で出現（丸ヶ谷戸古墳－大廓Ⅰ式期）

④ 大廓Ⅲ式期には沼津市域で次世代の周溝型前方後方墳が出現（高尾山古墳－大廓Ⅲ式期）

⑤ 大廓Ⅲ式期以降、関東の相模湾沿岸部や荒川水系で前方後方墳が出現する

→ 大廓型壺の広域波及と連動する現象

⑥ 墓墳上祭祀など墳墓祭祀にも用いられるが、集落からの出土が多く、壺形埴輪とは異質

→ 墳墓祭祀に限定されない一般的用途が主体

大廓型壺に対する報告者の見解

① 大廓型壺は東駿河産の稲粳を遠隔地に搬出する目的で誕生した（大廓Ⅱ式は奈良県纏向遺跡の辻土壙4下層から多量の稲粳殻層と伴って出土。山梨県域にも搬出。Ⅲ式期以降には関東の内陸部へ向けて搬出）



- ② 関東の内陸部への稲粃は海上輸送・水上輸送された（大廓型壺はその容器）
- ③ 稲粃の供与によって関東内陸部の経済を刺激し、東駿河からの出張交易拠点が形成された
- ④ 周溝型前方後方墳は、新設された内陸の津や市の司を葬るモニュメントであった。
- ⑤ 大廓型壺は稲粃建経済圏を関東甲信越に拡大させる機能を担い、その定着と共に消滅した。

前方後方墳の時代の幕開けに関する報告者の解釈（素描）

経済活動の飛躍的活性化 前方後円（方）墳の時代の到来を考えるうえでもっとも重視すべき事柄とはなにか。それは日本列島各地のさまざまな物産を商品化して、要所要所に交易の場となる市を確保し経済活動を飛躍的に活性化させたことにあったと考える。たとえば関東地方における古墳時代前期の標識遺跡、五領遺跡の近隣一帯（埼玉県東松山市域）に着目すれば、荒川流域の支流、都幾川のほとりに荷揚げ場と交易拠点となる空間をつくり、東京湾から荒川を經由して遡上させる船便が停泊可能な場所と市場を構築することになったと推定される。高坂3番町遺跡や反町遺跡が具体例で、このような場所を仮に「内陸の津と市」と呼ぶことにする（北條2017）。

それ以前から現地に設けられていた津や市を活用する場合も当然あったと推定される。しかし関東地方の内陸部では、新たに作りあげるケースの方が多かった可能性が高い。というのも津や市の開設は、未開拓であったエリアの耕地開拓と一体のものであったと把握されるからである（若狭2002）。いいかえれば、この時代に起こった経済活動の活性化とは、新規入植と拠点開発の積み重ねによって引き起こされたと理解すべきである。もっとも典型的なのは栃木県域で、この時代になって遺跡が急増する現象が認められる。

さまざまな経済効果 関東内陸部の人々は、新たに設けられた「内陸の津と市」を通じ、はるか遠くの西日本地域からもたらされる品々を初めて手にすることになったはずである。ひとたびこのような交易拠点が置かれると、それまでは近隣の狭い範囲で完結していた物産品の流れに変化が起こる。その一部が遠隔地との交易品の目録に加わる場合もあった。山梨県産の水晶など新たな“特産物”の発見や開発に結びつくこともあったに違いない。

ようするに「内陸の津と市」の設置は、経済活動への刺激以外のなにものでもない。近隣一帯の村々はそれまで経験したことのない騒々しい空気に包まれることになり、人口増加の呼び水ともなったと同時に、従来のムラの秩序は変容を余儀なくされたと考えられる。

もとより日本列島全域へのアクセスが可能になったことで、遠来から到来する若者との色恋沙汰も頻繁に起こったと推定される。市は古今東西を問わず男女の出会いの場だったからである。このような当事者同士の結びつきは遠隔地の集団を同族化させる結果（親族関係の拡大）を招く

ことも重要である。現在の感覚でいうところの経済効果がさまざまなレベルで巻き起こり、それまでの弥生ムラ感覚では想像できなかった交流の渦と社会の流動化を実感させられた時代、それが古墳時代の幕開けだったと推測される（北條2017）。

津と市を象徴する前方後円（方）墳 「内陸の津と市」や、新規入植地での開拓を管理統括する役割の人物が葬られることになったのが前方後円（方）墳であり、それは交易と交流によってもたらされた富を原資とし、津と市の性格を象徴し明示するモニュメントの必要性を背景とするものだったと推定される。その理由は各地の前方後円（方）墳の立地と物流の推定経路との間に明確な相関関係が認められるからである。だとすれば古墳づくりの財源は市から生まれる富だったと考えるのが妥当であるし、その目的も市に関わる宗教性に絞られてくる。

定説が説く「大和政権による支配権の拡大」とは、じつは経済レベルでの影響力の拡大にほかならず、経済を軸に人々の心を王権側に引きつけておくためのさまざまな仕掛けの内実を見極めることこそが、この時代を研究する上では重要な視点である。いわゆる政治モデルではなく、経済モデルこそが有効だと考える。

駿河の地域集団が主導した拠点づくり 関東・東北地方において上記の問題を考えると、主導的な役割を果たした存在として注目されるのは、東海地方東部、駿河湾沿岸部の地域集団である。彼らは弥生時代の後期（西暦1世紀）に関東地方南部に進出した実績をもち、相模湾沿岸地域に植民地を切り開き拠点を確保していた（西川1998、立花2005）。その実績を基礎に弥生時代終末期から古墳時代初頭（西暦3世紀後半）には、関東地方の内陸部や東北の太平洋沿岸部の要所要所に津と市を築き、地元住民を巻き込みながら、新たな経済圏をつくりあげたと推定される。ようするに彼ら駿河地域の諸集団が、関東・東北と大和王権側とをつなぐ“代理人”の役目を担ったと理解できる。そのような“代理人”の仲介なくして王権は成り立たない、ともいえる。奈良県纏向遺跡の辻土壙4下層出土の大廓型壺（大廓Ⅱ式）は、駿河地域から初期倭王権に向けて穀物上納が行われた（それによって支配下に入ることを宣言した）ことの明確な証拠だといえよう（北條2019）。

気候の寒冷化への対処 なお遠隔地への入植を伴う経済圏の拡大が引き起こされた背景には、東アジア世界全体を覆う気候の寒冷化があったと推定される。寒冷化に伴う人口支持力の低下はさまざまな側面における社会問題を発生させたと考えられ、当然そうした事態への対処と自己変革が求められたに違いない。近畿地方でも環濠集落を交易拠点とする従来型の経済体制は崩壊し、集落は分散化すると同時に広域的な水田開発が進められるようになった。東遠江や駿河の地域集団が相模湾沿岸部に向けて大規模な入植をおこなった理由も同じである。その意味で「内陸の津と市」を各地に広げ集団の再編成と耕地開発を進めるというさきに述べた諸現象は、当時の倭人社会全体が模索した対処策の一環だったと理解される。

以上の概括的理解を前提として、交易を原資に登場したと考えられる関東地方の前方後方墳とその社会の構造を考える。注目される現象は大廓型壺（柳沼2013）と呼ばれる超大型の土器の急速な広がりであり、この広がりとは前方後方墳の広がりとは深く関わる事実である。背後には内陸の津とモニュメントとの結びつきが想定されることになる。上記の現象を古代メソポタミアの〈ウルク・エキスパンション〉になぞらえて〈大廓エキスパンション〉と命名し、報告者は前方後円墳の時代の幕開けに関する新たな経済モデルを提示する。

【引用・参考文献】

安里進1998『グスク・共同体・村ー沖縄歴史考古学序説ー』溶樹書林

小泉龍人2002「ウルク・ワールドシステムとは何か」『西アジア考古学』第3号

立花実2005「神奈川県西部地域における古墳の成立過程」『東海史学』第39号

西川修一編1998『御屋敷添遺跡』財団法人かながわ考古学財団

北條芳隆2013「高尾山古墳と墳丘築造企画論」『西相模考古』第22号

北條芳隆2014「稲束と水稻農耕民」『日本史の方法』第11号

北條芳隆2017「関東地方への前方後円（方）墳の波及を考えるー東松山市高坂8号墳を素材としてー」『三角縁神獣鏡と3～4世紀の東松山』東松山市

北條芳隆2021「大廓型壺の胎土を考える」『西相模考古』29号

北條芳隆2022「纏向古墳群と周辺景観」『纏向学の最前線（纏向学研究10号）』纏向学研究センター

柳沼賢治2013「大郭式土器の広がりー駿河以東についてー」『駿河における前期古墳の再検討ー高尾山古墳の評価と位置づけを目指してー』（静岡県考古学会2013年度シンポジウム）

馬飼野行雄ほか1991『丸ヶ谷戸遺跡』（富士宮市文化財調査報告書第14集）

向日市教育委員会2014「五塚原古墳現地説明会資料」（同教委HPに掲載）

若狭徹2002「古墳時代の地域経営（上毛野クルマ地域の3～5世紀）」『考古学研究』第49巻2号

渡井英誉2013「大郭式土器から見た古墳時代前期」『駿河における前期古墳の再検討ー高尾山古墳の評価と位置づけを目指してー』（静岡県考古学会2013年度シンポジウム）

AlgaZe, G. 1989 The Uruk Expansion: Cross-cultural Exchange in Early Mesopotamian Civilization. Current Anthropol 30: 571-608.

